

中学校新聞づくり

いきいき、きらきら十勝・帯広の新聞づくり

～子どもたちの新聞制作を支える環境について～

北海道本別町立勇足中学校 福留 克志

1、はじめに
今年度から、中学校においても新しい教育課程に移行を完了し、小中学校ともそろって新しい時代の教育がスタートした。輝く未来を担う子どもたちの教育も現代社会の流れにマッチした内容が考えられている。中でも特に注目すべきは「情報」分野の教育だ。情報活用はもちろんだ、広く人に伝える発信手段もさまざまな、電子メディアの台頭が著しい中、注目すべきは「新聞」という手段。今回の指導要領改定でも目玉として取り入れられている新聞を使った教育だ。活用と制作発信、両方のとりくみが促されているが、ここ十勝・帯広では30年も前から新聞づくりを学校教育の中に取り入れてきている。

今回、教育課程の中にしつかりと位置づけられたことで、わかたに動きも活発になってきている。半面、中学校においては教科時数の増加に伴い、大きな変化の波も起きている。最近の動向を分析しながら、新聞王国と称されるここ十勝・帯広における学校での新聞づくりを支える環境や人材育成、学校における実践の具体例、子どもたちの意欲を高める仕掛けなどについて改めて振り返り、報告していきたい。また、これをきっかけに更に今後の活動の活性化に向け、弾みをつけていきたいと考える。

2、新聞づくりの取組の概要

ここ十勝・帯広では、新聞づくりに関して歴史は古く、おおよそ30年くらい前から具体的に取組を進めてきている。特に、パナル大のかへ新聞については、方眼紙に原稿用罫線を引き、ところからスタート、多くの時間を費やしながら、記事の企画から取材、記事の文章記述、インタビューや見出しなど手作り感いっぱい作品を数多く残している。これらの取組が十勝・帯広地域全体にまんべんなく広がっていったのは、言うまでもなく、取組自体の意義の高さに尽きる。言いかえると、学校教育の中で行う新聞づくりは企画から制作、完成までの過程の中に子どもたちに学ばせたい数多くの要素がぎっしりと詰め込まれているからである。また、「新聞づくりは仲間づくり」であるというように学級、集団づくりなど生徒指導上の効果も確かにある。さらに、取組の定着化を進めたのは、新

聞制作ノウハウの交流と人材の育成、作品交流の機会があげられる。各学校での作品を交流し、評価し合う各種コンクールの開催は、子どもたちに制作の意欲を喚起させるとともに優れた作品にふれる場としてもたいへん貴重なものである。ここで見逃せないのが、地元新聞社との連携。新聞づくりのフロアとしてのノウハウの提供を受けながら、さらに各種コンクールとともに支える立場として協力していただき、その姿勢は25年以上たった今も変わらぬ。また、十勝地区や帯広市にそれぞれ文化連盟組織が立ち上げられ、その中に新聞が位置づけられたことや北海道十勝新聞教育研究会の設立も大きな支えとなっている。これらは、学校の横のつながりをしつかりとさせ、教育委員会をも巻き込んだ公的な位置づけにもなっていることも大きなポイントである。

これらを受け、各学校では主に文化祭・学校祭に向けた発表の一つとして教育課程に位置づけ、新聞づくりを取組んできた。また、前回の指導要領の改訂では「総合的な学習の時間」が創設され、その中に位置づけたりと各学校それぞれの実態の中でしつかりとした時間確保をし、制作をしてきた経緯もある。さらに、各種講習会を企画・開催し、子どもたちへの啓蒙と指導者の育成に努めてきた。昨年度からは、管内の教職員を対象とした研修講座にも「新聞づくり」の講座を開設し、ノウハウの提供を始めたところである。

3、成果と課題、今後の展望

新聞づくりが子どもたちの数々の能力を開花させ、伸ばしていくことや生徒指導上の効果、各教科横断的ないわば総合力が試される活動であることは間違いない事実である。今後は、教科時数が増えた中で新聞制作活動の時間をどう確保していくか、学校の中でどの教育課程の位置づけをいかにして活動していくか、など実践や実践の交流を進めていく必要がある。今までも同様、子どもたち一人ひとりがいきいきと自分の力を発揮し、目をきらきら輝かせながら仲間と協力し、新聞制作を進めることができる環境を整備していきたい。